

## ～気候変動に応じた果樹の各種試験の取り組みについて～

近年、気候変動により猛暑、豪雨といったリスクが高まっており、果樹栽培を取り巻く環境は大きく変化しています。安定した生産と品質確保のためには新たな栽培技術の検証が不可欠となっており、ここでは令和7年度に実施した気候変動に応じた果樹の各種試験の取り組みについて紹介します。

### 1. ル レクチエの果実汚損発生要因の把握

「ル レクチエ」のほ場内湿度や果実袋内湿度と果実汚損の発生状況を調査した。

#### (1) 調査内容

ア. 湿度と果実袋の種類による比較：袋かけ後～収穫まで（6月16日～10月17日）  
ほ場内湿度、果実袋内湿度、収穫時の果実汚損状況

イ. 枝の密度、照度調査（9月24日）

1㎡当たり側枝数・側枝長、結果母枝数・結果母枝長、新梢数・新梢長、棚上・棚下の照度

#### (2) 結果と考察

果実汚損は使用する果実袋に加え、気象条件が大きく影響することが改めて確認できた。そのため、

(ア) ほ場湿度を上げない管理

防風網やほ場周囲の遮へい物など、空気が停滞しないようにする。

(イ) 果実袋の選択

湿度が上がりにくく（濡れにくく）、下がりやすく（乾きやすい）、果実に密着しにくく、その効果が4カ月維持できる果実袋を使う（開発が必要）。

(ウ) 枝密度を考えたせん定・新梢管理

新梢密度 30本/㎡、新梢総延長 19m/㎡を超えない管理が重要となる。

これらは本年の結果であり、今後も果実汚損の発生条件と対策については調査が必要である

### 2. 「新高」果実袋の種類と高温障害の発生状況調査

日本なし「新高」は、近年の高温によって果肉障害が発生しているため、障害を軽減できる果実袋を調査した。

#### (1) 調査内容

高温対策効果が期待できる果実袋2種について調査した。

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。

区	果実袋	備考
実証区 1	①A 社製高温対策袋	7月1日袋かけ
実証区 2	②B 社製 2重袋	10月8日収穫
慣行区	③慣行 2重袋	各区 10果調査

## (2) 結果と考察

今回調査した果実袋では、温度と果肉障害の発生状況から、①A社製高温対策袋が高温対策に有効と思われた。但し、①A社製高温対策袋と②B社製2重袋は、③慣行2重袋に比べ、果肉硬度が柔らかめで糖度が若干低くなる場合もあることを理解して使う必要がある（糖度は14度を超え僅差であり特別低いわけではない）。

### (参考) 障害果の状況

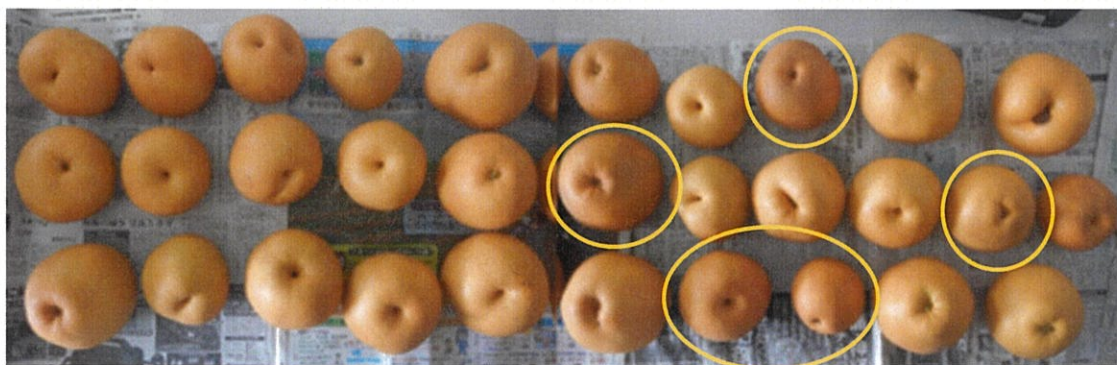
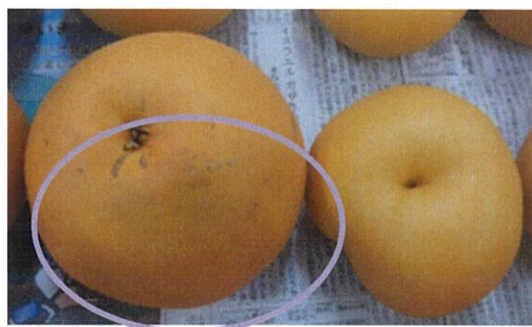


図1 収穫時の果実 上から、①A社製、②B社製、③慣行袋



障害果の外観  
(左の果実)  
囲み部分が変色

## 3. おわりに

各機関においてこの他にも様々な試験が実施されており、次年度以降も継続して各種課題に取り組んでいきます。

また、今回試験を実施したような技術的な対応に加え、樹種によっては品種の見直しも含めた品種構成の検討等も並行して進めていく必要があります。今後も果樹産地維持に向けて、関係者一丸となって取り組みを進めていきます。

### (調査協力)

調査及びデータ集計：新潟普及センター、JA新潟かがやき

(園芸部 果実花き課)

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。